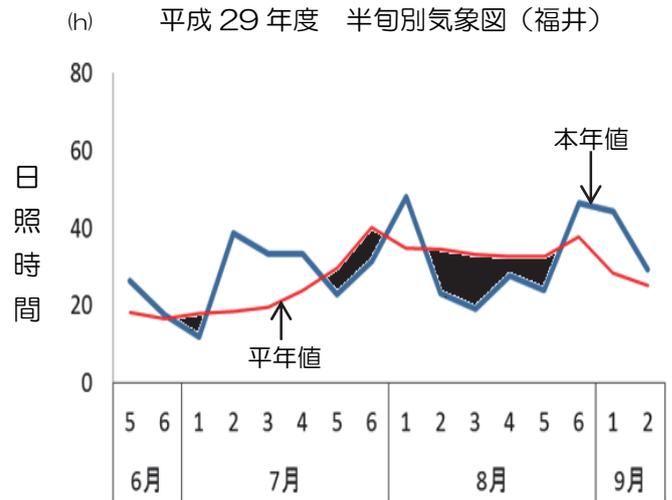


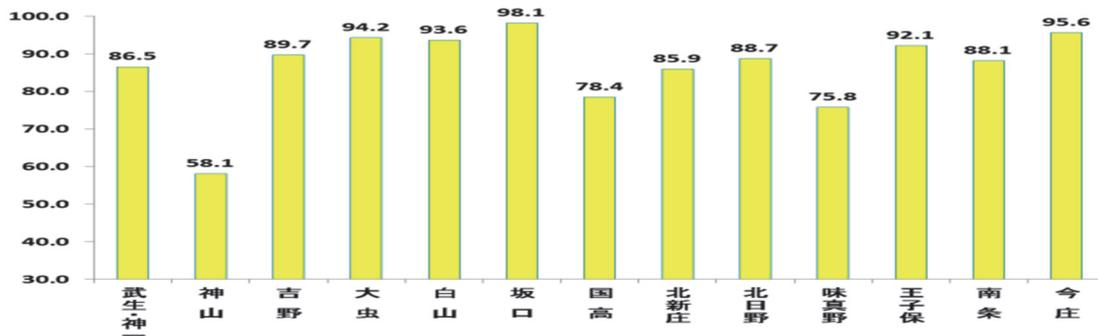
平成29年産米の作柄概況について

平成29年産米の作柄は、6月、低温で推移し生育が心配されましたが、7月は天候も回復し、生育状況は平年並みに推移しました。しかしながら、8月に入り天候が悪く、日照不足の影響により登熟不良で網下米が多く、収量は昨年を下回る結果となりました。品質については、ハナエチゼンでは斑点米、コシヒカリ・日本晴では乳白による格落ちが多く見られる状況です。

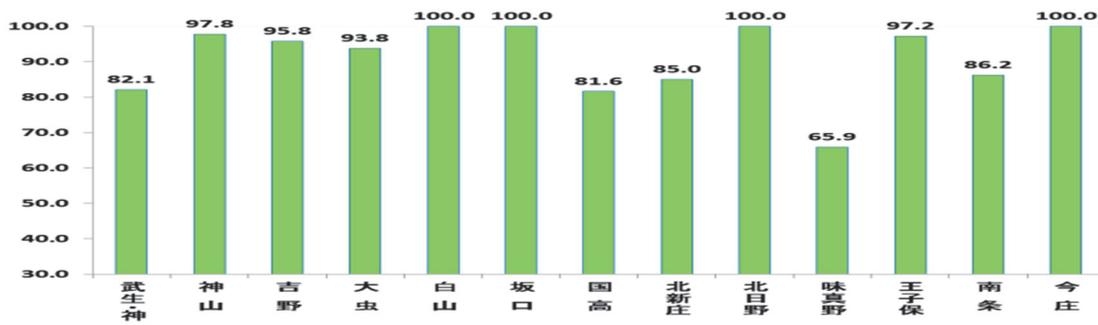


コシヒカリ(倉前)上位等級比率 88.5%

10月11日現在



日本晴(倉前)上位等級比率 89.5%



平成29年産米 肥料試験・生育調査圃場 脱穀調査平均データ

品種名	調査点数(点)	粗玄米重(kg/10a)	精玄米量(kg/10a)	網下量(kg/10a)	網下率(%)
ハナエチゼン	10	574	526	48	9.1
コシヒカリ	13	520	464	56	12.1
あきさかり	2	625	547	78	14.3
日本晴	16	549	523	26	5.0

秋の田起こし3つのポイント

～ 土づくりと秋の田起こしで気象変動に負けない稲づくりを ～

ポイント ①

今より3cm深耕(目標15cm)

効果： 3cm深耕することで根が張る領域を増やし、水分・栄養分を吸収し、さらに、ワラもすき込み易くなります。



ポイント ②

稲わらの早期すき込み腐熟促進

効果： 稲わらを早期にすき込むことで栄養分を増やし、団粒構造になり、(ワラは全量、堆肥は1t)土を肥やす効果があります。来春、移植時期に稲わらをすき込むと代掻きや田植作業がやりにくいだけでなく、硫化水素や有機酸の発生により、根がダメージを受けます。

ポイント ③

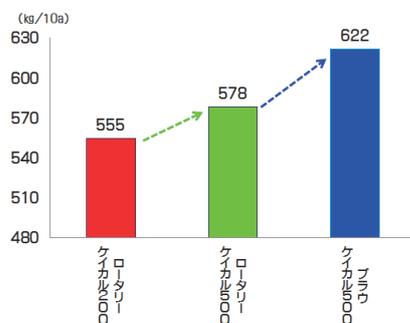
土壌改良資材(粒状しきぶホホワイトなど)の施用

効果： ケイ酸質資材の施用により地力UPを図り、異常気象の条件下でも登熟歩合や整粒歩合を高めます。

平成 29 年産米 土づくり資材試験圃場 脱穀調査平均データ

品種名	資材名	全量 (kg/10a)	籾重 (kg/10a)	粗玄米重 (kg/10a)	精玄米重 (kg/10a)	網下重 (kg/10a)	網下率 (%)
コシヒカリ	無散布	1,386	714	521	468	53	11.3
	しきぶホホワイト	1,391	745	539	492	47	9.6

砂壤土や礫質など、地力が乏しい圃場では土壌改良資材の選択の前に、深耕による根の生育範囲の確保や地力窒素の有効活用が極めて重要です。根の伸長の促進と生育期間中の栄養凋落状態を回避したうえで、ケイ酸資材などを併せて施用することが、収量や品質の向上につながると思われます。(平成26年産試験データ右図参照)



♪ 平坦地での特別(有機質肥料)栽培の場合、けいふん等の投入により、腐植を高めつつ初期生育を確保するようにしましょう。

平成30年産米の収量向上は土づくりと深耕から！

深耕・土づくりのどちらかだけでなく両方あわせて実施を！